



13
1889
正月

本
平松
訪多
惣

同上

世間仲人氣質卷之二

(一)

ゆくと見ゆてかの男が一風か女房の穿鑿
まご小乞が寺びらうのとゆう人のを嫁
かへすりのありとあきとあくとあぐるゆうと
眼まきりをひと所でも城う睫と見るゆあくとよ
店のちゆとだよ。被ふハまうげと一ふひそ紫
青する。昭ハねどアラ役うれどもアラ役のうに
あるまくとくと。被ふハまうげとくとえよも
もは傳とさうげ。由ハおるゆうて傳よがも日あ
なり。我人のうちつゝ多めのばせ身ともひくとある
ちさ和文とあはつてうそ人の痛とをきとのよ。

乞う嫁のこゝろ皆の嫁とてゐる所で立あつた
よがれと相手持きりくある所へまわる又させられ
うち佛はく葉亭の面へ坐てすけ。は後て彼女じがそ
うくち経語をもつて年うと公摺へ立て
きどりたとをみて涙るゑうく後美場で寢むせぶさ
けんとまの出るとみそにかもの怪すん。ふ
中魚場に立てば氣とらむとおもひ月十
八日の雇賃と毎月あるよ生常立くとまうとまうと
うのわらくみ便所。お門をよいて押入のまゝ戸
簾をもねり、者戸柄を挂すて障もありてさきへひく
ひて女房の聲のよ達もつてゆくとまうとまうと
間ううううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううううう

あう。じ氣あ女房が中とりて嫁ればやにま守聟入音
ふ高ち一きあいの仲人が生き付てめ爲人極つとて女房の
と女房。あいの聲と響てうつゆゆゆゆ
が。是今聲にてひりますかゆううううううううう
あを追付して仕ますとあうふうふうふうふうふ
續々聲のとく。そきとゆうとゆうとゆうとゆうと
はくじ女房が中づ云初くゆううう。そきと方これ事や
が。そくんかくそくんかくそくんかくそくんかく
は。今町までへきくへ奥底も云う内室の耕人
とも云づさ娘をひきあひいてもと里くらきこも
かうひづかうひづかうひづかうひづかうひづか
てひづかうひづかうひづかうひづかうひづかうひづ

まをうへてうへてと奥のうへいきぬびりとふるゝとまをうす
ほじかこじひやとからやひとくらえんのとくや二十年もすとえ
とえがきとどくとじか中がふそくとほりはれなと年は
三十八年まわるはもふ殊教うそとわて始て始てどもものまをう
すとれは後後場へまじまよして年下ト心へ嫁とりづ
に嫁とやうとぐら。算をへとぐら。ほがよかくとむる温故
と新文書すこ人のものにあ仲人筋のとお徳するほ生孫
ぐひのアセナ。あそとでとととまゆ。うそかきとおまけ
じか中が筋のうちよへ縁落すれはほと一とつまけでる
丈志せんとおとくまく仲人をとくとくのへら縁組を
れすめくかすてもうよ音のあがごさうますと清令を破る
砂塵がけが西行てお達すと行縁組をとめく縁合を

お中が胸の筋うねりとてあそびゆくの清合のかみ。相
もう日あくまうれと切ある仲人師傳まを前幕とつ。男がお
中が筋あそくのれぞれ斬筋のゆよ付ててまくはるひま
しとるをれどお中がまくはるを幸むまくわがござります。
おニユ族女やまくまくへ百人ます。まくはる。おとそとそ
えの匂い化言部。人をまそとくにかわらねるをとがで
どくふ一つも筋のうい始まくと筋の筋の筋の筋の筋
筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋
筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋
筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋
筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋



びそそぎ至人ぞうりきなり縁のよつしグニドウトガラ
と歎すすり声中。ありそそぞうもうううせんける。たゞ
色いろくろ前と云ぬて。有まへと云ふあよ道は上京のま
醫術うつて。行進と洋刺。をとにくろうとくとくお育
てだきうちとぞくねう。経革。よあらぬ小さがとう
如く教すりて、脣風のとにうるてみく。知く。夜柳の
よふをととく古かうするねで、かな。あらむろく
ろくとよの性。よあるゆく。ひう。文字に。脉脳。そ
みて。ひ療法。醫の摘要集。にとあう。小児。四カ年まで
よ瘡。とくとよ。びよ人よみへ。瘡。なめが病。も回。あ
志。けねづら。瘡。内へ。の。ゆうひ。みどり。と。生。の。ほ
人。而。瘡。と。瘡。の。口。ひ。飯。と。よ。病。と。ま。す。と。生。

そろんその反癪。け猿の足。脚と。今。よ。かの首の疽
ゆく。よ。き。や。と。か。れ。虚。え。な。う。と。く。物。よ。と。薏。茹。に。と。云
草。種。の。和。名。珠。救。玉。の。に。く。ら。白。茶。の。く。ち。け。た。と。ど
人。而。瘡。へ。瘡。の。接。口。ひ。う。ゆ。と。と。ふ。け。口。金。ビ。ー。く
痛。あ。し。と。内。白。茶。の。ゆ。う。薏。茹。に。を。饭。ア。く。た。と。
瘡。の。足。よ。す。セ。内。へ。痛。ア。而。よ。わ。く。お。み。く。そ。と。吟
ぢ。る。よ。で。お。薏。茹。に。の。美。あ。蘿。茶。と。く。そ。と。お。ま。る。よ。お
美。の。志。あ。い。う。極。そ。ろ。首。へ。生。れ。也。白。と。女。よ。り。く
男。よ。す。う。う。い。ね。人。よ。す。う。う。あ。が。業。と。効。の。肉。へ。の
す。す。よ。ア。と。根。が。よ。と。き。う。て。熱。脳。す。と。彼。筋。と。ぐ
の。ひ。く。首。が。ふ。す。よ。も。う。あ。て。の。い。と。ち。わ。と。と。の。る。要
つ。お。り。う。た。と。す。と。そ。が。の。き。と。ざ。う。い。ふ。り。け。体。研

比人（ひじん）がもとより幻（げん）の形（かたち）よしてアラハ（アラハ）へも人の同一（だいいやう）、
を人（ひと）やとの形（かたち）による所（ところ）。そへの方（ほう）かあともするナも同色（どういろ）
よすきへるナ（が）引（ひく）よえきアラハ（アラハ）の形（かたち）。ありひ、色（いろ）解（わか）の脊（せ）
らるナ（ひと）よもす中（なか）もイ脊（せ）者（しゃ）ハスをすもえも。又よも
あひて、膝（ひざ）脛（きのこ）前（まへ）とく袂（もと）そがめをもく衣襟（いきん）脣（くちばし）のえ
キトニ、胸（むね）一（いつ）小（ちいさ）い。袖（そで）をもく脣（くちばし）のひ。
トキニ、身（み）の生（なま）はまじでまくをくをく歎（たん）の所（ところ）もわよひが
おもくもちと見えず、小（ちいさ）なる膝（ひざ）脛（きのこ）そのまるがまあるゆと
あわすかわすや秋（あき）のきづかひとゆでえもとけふとぞうます。そ
はガニヨ服（はなし）女（めのこ）が、もうくつ肩（かた）よせば、まづいり。立ちまぐ
よ腰（こし）の底（そこ）よ立ちまぬよとて、闇（くろ）ひよひてござりま
くろ、ひ女（めのこ）九十九の年（とし）、今も、主人（しゆじん）とおもひて山（さん）を

一女アノ有てまつたがアテウタニモトアヘン
さかいやきぬアリム。ひすに全面歎けて、糠穀を合歎
嫁アタハタ有キ仲人アシケレトモちと肉がるあ
こしがんがりひてれち難く。う
え、うんとぞあらがく前のもうならず人のもんで、着
よすも、衣披、ほひよまくは重ぬの本音。肩の上
と人のきい内をつむりでともも、内びくわゆる事無
きくも寧ヌ女房とせらうが、此を承知のて、もと六耳
らの男と金百疋、の高達入、あ實ハヒヤと云ふと今
アヒ付てからまいらア、先女房とアリハ、ねじき二人の二人を
まづうがナカミゆく。舅姑のきいナリヒトヨミ、お通船
のあり、娘と仲人アシケレ、まううふが、お通船アモアラル

よれ。い男も心を痛とてあがめて大もんとする。
のそ。そ、あとの縁組。や肩尾うま一ばく室うべ十分。
かまくらすあでのしき。が中へん一ぞきしてま
男よも解てよめ自ら能がゆうといふてこそある

(二) 大坂うどりくと東へ出見せの大あく

衣櫻屏風のひがはかへ田舎者すと重候
人含馬もし含口綱へるのあらうねとすり男大坂處
東方うとすれと那波さんと西園向屋の代る
る。金假がまふ付ていととらうひへうけよど。さと
文情すみて假とちうぢうがまうり女とゆすう
ぬりけふきてほへりうて三年うちかせに三十六六ま
金百ああまうたうて商人坐りとくわちる人をたのみて

お京橋西口都もろーけり百両のえまとてぬず小
して假物。あらうぢう。すくも女房でとお賣さんち
來うきべ。怪で要りつまう。彼はま尼寺を房が今日づく
本と豚極。その女房太醫の達定でとむらそびてありと
おひきうちがんじくを」のうじううでまく又守のまうあらう
手をままし。は縁組をよ嫁が。かねや。ころそがんく
一生はまし。お出處とそ後へうね。豚極をが。年老と
下車のハテ。行車と縁つてとあらうと。これ。義氣が
サア金又あめくと古ううと。うえ。おとが毛うと先と
を合意する縁組すと。と多く立。をきりとくらが。麻
か中が更りて仲の縁組と夫と入門と。第一の縁組と。娘
こみ。金百両のおまきうろくをぐるんで一生を婦となり

あまえん更ひてよめをあんちゆうとひそひて
あまどろあらそくすとサア底えまえんさんとあはまうて
あまえんとせびのすとひそひてよめをあはまうて
もまじもまじとひそひてよめをあはまうて
まじて望月弓弓弓の月は御教の行者細つてもう三日ふ
嬪絶えぬくさのりへうとも相もはずれども。二月鷺
もえと女房とひと食せ我うえとく女房のお茶、食まと食
うねて望月弓弓弓の月は御教の行者細つてもう三日ふ
小鳥の内弓弓と出仲のうくろそへんをあう。まもる神
立のうくろそへんをあう。まもる神
まもるのうくろそへんをあう。まもる神
アキのむか付神や底えまが女房へうくろそへんをあう。

そがゆりておとこまのあらの匂ひよどて、まこと見ゆ
くよもよももむかへり。ひやかはつまうに梅の木
乃枝よまとのそえさねぐのまことまことまこと
のよもよもむかへるゑへまうひうくろまごそんておと女房ど
きく云ちのふゑよとまき。いまみとまき、と女房どく電
ぐろくろまきぞまく。まくまくまくまくまくまく
わらげまくまくまくまくまくまくまくまくまく
ゆえゆいあからぬのまくまくまくまくまくまく
つあふ市とまくまくまくまくまくまくまくまく
を左をふくらむとアモガモのあひあ。俄よむ代丁雅ト女ト
男まで石くとまくまくまくまくまくまくまく
ぬれでまくとけいとけいとけいとけいとけい

まじかのまきにせてもうは戸を出るやうにへてと候ふが
まへあひて下りてこたへどももくしてねまふ身と家
事とまづ今へ秋が至るまつ所の事もくじらんかうす
うありけりともしてゐ考をもとげてての娘をむかふ
事もくじらんれえちねとそひ戸へまうきくふまく
まうく文情ゆゑまよとそひの娘ひくまくくうと
まくまくどこかの娘を一人めり母女ともくもく
まとくまくれと別離するまこの中にてまよと母娘と
を結ぶまくが物語の事へ高きとくゆへ一聲のゆゑ
とくまくもくとくまくまのゆへ一人を失ひてまく
あはの裏店より被難ひて、つまひて、あらわのそれ
ます。れも、まほれ二年つとて二人がやかましく食ふ事

三年後の一月のうちの如く、諸事のつまみ
を取るに、何より身紙の活と都合とが、ひまな男えりは
かきなみのうへ、また又傳とれど、いふ四^{ソウ}五^{ゴウ}
を被女、あまの二階住^{スル}よもやも移^シ人^{スル}ます。
松原は春^ハまだすすへ居^リ者^モと立^アあせん立ち
てうらへあらう^スの、通^スよ。あくろ^カうさきの乞
めの女中^のまゆあ^カくま^ス日^ハ一^人あ^リカ^ミい^ムは
う生^ハぬりひよあ^セ、彼女^サ中^ニ立^ア、立^アは^シは
思^ハあ^リ。あ^リゆ^キなま^ハる^ス心^を立^タて^シむ^カし^ハは
久^シ人^もう^シう^シ人^の御^マめ^スひ^トお^シき^ム仲^人ぐ
生^ハ歸^ス、家^を下^スと^シ事^をち^や。極^度無^人そ^の
の氣^{くす}ます。まうふ^シ云^カま^スと^シても^カと

まよを口ぞくもあづまゆへ生れ付てぬのたきうすりそ
ひまえぬぐれむへ去がまうかう門と都すらくもきやうす
ゆきとどきのどんじぬりくろくもうちに全百あれにて嫁
入ぐ毛をとひのたの繩根根分はぬせんのうち、ちのびんよ
ととまととほんでもととすもとち中 枝まわ、おもとひ安
すと人よ知じ一ぬを月をアセみゆうみて重けがだが
ひりふるあらは、うやうやと金百あおその都とく
ううかくらきの女をとく、うううういのはてあお女房
ううあらわみ縁縁がわうきぐれとねグワツモあく都んで
うちもと幻あゑの云ねり象に伊あく女房とつて雙
さすも妻みとわう男のまゆとねちくやうが道が正ぐみ
かうううとまう。かくうとまうぬあうちのううとく嫁



う風ふうとしておまつらどもおまえをうけとく板ば男が被
ゆくとその中に毛うさぬちううねうか半身のあま裏
もうろくろ肩の嫁よ金子百鬼つけりいはえとみゆうゆ
かやと幸よと成吉事ほえとほほのあは二三日よそもあ。
うてあまの二きくしてある行なが今の大妻とく
ろまくすめみてアキラケリとくは算筈すらも金百あ
つも。そひあへ入のまく代役もとあまの金のむすと
室うの十か一金接あ仲人三人の中立つて板ねが空た
たくスのカクレスあ金多とえとふして初うきした
けせん付あくま小弓や弓をあま後ハシル人をす
けあまもせじうケ多者の方代と宿の見合で弊ああと
きと一あくまくすも人まれよとよおまえをうるわ

あうみけいは彼仲人のが中年老人と云の者ぞぬ史ち坂屋
あらが女房はうくろそで板まよ森へとそがめりてむ。室
を小坡の小町もありすまよまよ。壁のき御殿うど
が仲人と十か一金きりひまくとせとゆくすくじうそ
與と壁をやどねをまわる。又ねあらわと仲人はあくま
もひあくふつくとあ口に入れた且那うとでくわあくじけ
えれぬ。づよくあまの女房のあくま女房とあやみに
くら立とせせん付の賣場よ出とすとばと目と
ろくろその女房がア毎入出とあしすとよ便利が京
中はかのうかのうか毎日毎夜のわ実つあふ市とだすと
か町のとひ後のうかあまの女房とあやみに
をりとおきて京今と接人中れく。妻が大坂の母も面接

りお妾下男とつるやくをまう別よ隣居をまう。高
ちうた坂の家主と出入ります。今ハ一家日がふきてて、金
色すともよく、よく、よく、よく、よく、よく、よく、
そま入る一度ふ様とみて。もうとくせきひなみの人の
つまよしあれあんなのとまうす。又もあめあめとまう
京ちうが女房たか年あねのち室がまうたやとまう。ば
あらとがまうとがまうとがまうとまうとまうとまうとまうと
寝ねまくらくまくらくまくらくまくらくまくらくまくらく

世間仲人乳賀巻之四

一

よし酒 もかくこあ隣 のちまゆい仕事
仲人の仕事もかくこあ隣 がち度 形
事不別と云奉有て仕事からそもく乳風のうち
あるとみえ。京とつとも丸を町通う小ハよ京竹原町
うち曰京西と云中京。に京うち面と下京と云て
上中下の人も風俗ふざれ不協のうよ京の人に
津所出をゆかのづく人ねく。りこれ風俗よか
してゆかとやうう。中京ハよ京の風をうう。
又ト京の持美小抜目のかい京に小さなモモの
切若りと。下京の人たちのづく方とがよお言ひて

かうすくお葉にえもほく。御まくは眼波乃
風波りうつてひだり。舞衣市中川あ川東ひ云母
みど町の本戸がうちもそも脚での風俗の邊のみ。
そのまゝも湯を浴び身をすりとすりとおもふ
下京鳥丸通よ着裳夜とあさうす鴎庭家おもふ
人うきうき藏うけの商人なり更子の年季女を云
人のスラムをうるまう。とく女はよめ一人自身ハ着裳夜
あはいわくまう。とく女はよめ一人自身ハ着裳夜
乃は立派羅衣たのほのほのとじまとやまとと
ね着拂のひととん切りて五羽の女をとゆび下さんと
うせ。宿通りは一とくぬつこすまの内ハ拂づむる
うてへ縫ひ身のるをうきとまく云うを行儀と能

可くおハツ内うまくとまうと云せ。おハ室とまく
りそむき島主の女房のうまくとまうと云せ
お實で芝居とまくは後にはスミとまくとまくと
かへ禁酒。おまうハ年に一交うとまくも約束す。
又よ弟羅とぞじまくお實す。縫ぬハ四月のれう
おハ身とまくとまくと云せ。家とまく女房も
之とまくとまくとまくと云せ。お實すとお口信す
と田舎ふあくとまくとまくとまくとまくと
へ立すお身と二人肩透入せ。扇玉度掌をと
つ男。お身扇引足とだらうみて小をひら
おもづくと田舎へうのあと始まるが船よが舟よ

えり。物とアラカルアキ。母がもうへをやども
今、おとづれと身まぐれあふ病の経とくさと
似て機知と事。抑ハ病のち病とすに
ともかくま抹ちうが。有入庭へてより六年月半十
みの年まくふ二形口れあと拓きふり。病の
方を二人よしの方とケ。室と今ハ多かと申
弓は三射系かとうる。肉のよひふての事。
もと小瀧。主計。家よりひのつせん。
極めぬ夜やの家氣が空房身手に云々うむか
捕鷹て今。主計の話もやをせば。片毛鳥よ捕と
さづきうが。うとくが。人よ。御侍よつさ
ておねがえんや。まのゆ。仲ともねがえんや

すされはとのまへてあらわれつゝも。一まみの女
はひそひとくさんやくべと夜のまのまへて
じきぬ。先嫁とれ入をとすまもして。町内
ちちかすらほく。そもそもへ一まちあひうるお
すふゑよ。板縫れのれ、中戸もと内、大もとせ
と、妻のえきの一石、ちとぞりすくもつゝ。
あ代わ行えがくづくとて、みてて、あ
石もとくもれのつねにまう一のゆい、もく
りゆくもれのつねにまう一のゆい、もく
きふれ追へます。ねじまへまのたま
をひそひとくさんやくべと夜のまのまへて
はいたるとれらべたる主婦うちかくすくひ



ゆゆきて、おのれの心からうかれ下さるべく人を人えんや
の義、極まぢりまゆふたまことひの義のじよよみとあ
とわけぬふをとこそござりて、嫁祝うちが厄のらとそ
とくびもうちゆてつまそとゆゑと。他のごうちまん、紫
麁ふくをとてよとくまくすゞ一毛で二人さんや。
他の女みは、豈用極厄をのらんぞ、ぐらうすりと
ぐく。極嫁のあもほほん、多くのくらうすりと
はまくとくまく、御内ハ桃竹うすりとくに
こむりじらうすりとくに、毛で毛すりとくに
ゆうがくとくに、ひゆとくにとくのこかせと下る
べ。且ゆゆまびんせんせんせんせんせんせんせん
日のりゆよみけりが自古より一度の役をとてゐる

もよおひとすらもつむらが、内里で一家三支
もせそやうめなまきをまのちうひ。仲人忠義七^{アキシ}
嫁の里へひもよひのやくそくえうて、善あふ事^{シテ}
あり。うかとえり、うかとえり、^{アキシ}の戸もとすうすうも^{アキシ}
云々念みのきうた戸のじきもとをぬめとくのうけ。
うちらが椎^{アキシ}竹^{アキシ}嫁あね^{アキシ}とえくらやくそくの色^{アキシ}
うきゆとと。門^{アキシ}夕^{アキシ}ゆく九^{アキシ}月^{アキシ}のゆきは日^{アキシ}あてまを^{アキシ}
でこまりますとくもく男^{アキシ}の神^{アキシ}とれり、ゆくゆくとくとく
伏^{アキシ}ていとば。すくへぬ^{アキシ}入^{アキシ}口^{アキシ}のうづ^{アキシ}とも、息^{アキシ}とつ^{アキシ}く嫁^{アキシ}
ま^{アキシ}一^{アキシ}つ^{アキシ}の^{アキシ}て仲人よ^{アキシ}、さう^{アキシ}をうき^{アキシ}て、^{アキシ}ま^{アキシ}る^{アキシ}う^{アキシ}い^{アキシ}の^{アキシ}を^{アキシ}極^{アキシ}ひ仲人や^{アキシ}、^{アキシ}ま^{アキシ}年^{アキシ}八十^{アキシ}あきらかに^{アキシ}どき^{アキシ}
すく^{アキシ}一^{アキシ}度^{アキシ}を嫁^{アキシ}への世話^{アキシ}へ^{アキシ}こ^{アキシ}り^{アキシ}う^{アキシ}を^{アキシ}が^{アキシ}じ^{アキシ}そ^{アキシ}

仲人きりやねをもすひの意紙たまふりうそを教へ
る。是日はちよと移居ますと、主ふあ隣の生家と隣
組の御子さんも来ました。さうして、お隣の生家をめぐ
らしく、かちんづひ。わのへみ化けよ、うんやまへ
めく家系のあ家系のあ家系のあ家系のあ家系のあ
じい男。毛庇ひ、先ち、家系のあ家系のあ家系のあ
ひの父の處へ出で、ねこ、父の處へ出で、ねこ、
ゆきひさんと、うきよを。底切とよかく育てて、育て
て、まごあつまう。うきよもアラビド。底く付くが、
懸命とす。うきよが、うきよもアラビド。底く付くが、
あがえ。年來のとひ節、とひ節、とひ節、とひ節、
まつり然一々んす。おおおおおおおおおおおおおおお

うとくすくへんがちとアラヘアリのまへうらへ
からひかに着てあきん人出事無ふ衣とおもふが
あふきもふあひよトヤ人がござりまことつもせんと
八さいふれ是幸とをきとむつ小毛を衣のえとゆる
とぞくとぞく人の里もたま共くうらでゑす
どとしよハ歌のとちよを氣れ、ゑべぞくこざるが
の。生糸や金こぬはうあうとて、浦はが田くちく
とれとれの白と同うすふ門口もとをねがむひひ
てそく。まきとゆひてまくされど、まきがひひゆるを
も。あうとれの白とちがひ、まき一筋でともまきと
さびをもとさびとやくとて、とくとくとあくとくら
まきとれの白とまきとあくとくとあくとくと

さきとれ雪よ廻り始と我と舞うあきとしとてをま
うとう仲人とお嫁が今又くとて、笑ふ來との花う
程とゆふふ思ふ、これうれ

二　えんきはハ女乃えと男れと徳うむか體へ
えんきの御事あくもゆふ一弓の長くが
知敷ふあうとて、あまくとて、アキとて、アスビとて
おれふと、おれのたまへとおしきじのまくとお
のえうとて、づりとサとすきて、まくつひ。海へ飛び
て、おれぬもりりと、あねとよ人のぬと、金、ばな
本と、おとがきのとて、おれのとて、今、おとと
の経と、おもと、おとと、おとと、おとと、おとと
とひとととく今、おと付しげじ仲人のたまへ眼うえ

てともおまえの嫁の記が乞はらひどくとよあわと
だまいておまかへうんでもおぬゑゆめへりうから
おれとまくらをうけうけのゆふやすむろはまと
嫁入へまどきは扇金玉乗のてあら嫁入の門達す
えきげとさりばるまゆでとハ扇屋たまらす
金とくとくおま秋夜ゆくにじにけの縁組嫁入の柴
見はまかとすでさんとまくらの玉。ねま玉乗五代仲
人。後醍醐天皇。御所。御所。御所。御所。
もしもとま玉乗の主人。ま玉乗。ま玉乗。ま玉乗。
とすぐ主のうづ仲人役のうづ仲人役のうづ仲人役
おのの歴もつううのうづ仲人役のうづ仲人役のうづ仲人役
御のうづ仲人役のうづ仲人役のうづ仲人役のうづ仲人役

嫁は黒衣とひそやうが初代筆写れむ縫と織りハ。
少佐のねが足のま乘今取ひすびの主の万仲人役を
つまむすれますとけどもまえゆきとゆるかとくや
わうき。金を四萬石。今後よお爲す。かと育乃
宿命つまむとやまむと。四十あまりの人がま乗と
一金をやされ。まよまよと下まわ。時面のけとく
か拂折のちと。腰うされ。あく間にひうがきとて
少しあ下まき。おとと。あらうせ。初日と。まよまよと
坐ぬ。九月。うき。おのいと。あらふ。久乘名代被れ。坐
坐ぬ。おのいのひ。あくまうと。おとふ。おとほ。うき。
あがふ。おと入。うき。うき。うき。うき。



まをすすましと筆のひもをひきひらひ
見まうや合せり西とちかくへるもじひにむすりて坐ま
せどちくとづくらがをねかく一あくともりくや日さ
ーとちあわてするもをうすをたまてびざくとまくか
ひうきますと煙籠ふは入、室のとよそひ邊舟にはなま
うさりぬうそくしとひよみゆくひでねくも年。
列ものせで桃村の大とよさけりまきてそろくは聞
きあるとえの内らんもたまゆでござりますとみてねくが
神をゆゑあきらゆつ不因とくもつまつこのすまがたを養
ひ鳥ハ否せじよ度ふゑくづの矣。重き事無ハふ然一人と
ヤリナリ。今タハ一あひ起分一人ヨモイゆくは家の
少根文と小清の主君一あ虎と見て是今のも庵。され

すすす見ハるこのじ翁の口實れもひさんや見えどキテ
まと聞ひやひなごとあ隣りひすもまゐのゆふ在るま
ね。極城くつ高のまきと縦縦と今取けゆも、至國が小経
縦かうもみて取れしひすとまゐひそせん。と
小石ぞこまくと家のちぐさのえんや極毛の仲人を
もあをまつての産れ名代へ仲人も四、五の忠を立てる
ゆのからうひやあひもへごちまへ、五家の娘ひづく方こ又
始とをとれもあまうふゆり経縦かうも小町内法部をす
きのうとまはすとおこひゆひゆ大石もひ織子と云ひ
と金のゆ法圓寺の僕約ひんびんつひんくら五娘への門
道そくさうくせよ本と娘への取交が無くままでむを
こうゆふゆくとひあひ娘への取交がりてんめり

高志居ト。色ハシラヅト。麻わトアリ。モハムニテアリ
シタハムカレヒミタカレ。松山處の事ニムジテ遠の
事ハ寳ドリ。ウモジガ無ア。嫁ノアズキムヤウト。
仲人名代のたまニム男ノアタマ。ものもとのぞ見け。桃
竹の大丈ノ角ト。アサトコノ角。桃の白ツと同リ。ト。モア
シタハム。ソレナリ。今ハ門足。野の下小亭。カ
中ミタハ。夜廻の内。ナリ。ナリ。す。仰。ト。ス。ナ。ソ。ト。ヒ。嫁入、
つ邊。今ハ夜廻の事。要。ナ。婚ヘ。二組邊。入。カ。ト。ソ。グ。マ
(く)ス。主。本。年。モ。ヘ。ト。初。喪。ナ。モ。ア。ロ。被。蓋。は。耳。ヘ
て。町の主。モ。ア。ソ。ナ。モ。ソ。ヒ。町中。洋。打。ナ。ト。ア。ゴ。ミ。ハ。シ。ル。キ
無。お。よ。モ。キ。テ。女。ア。モ。ナ。ダ。夜。廻。の。門。足。の。モ。ル。ハ。身。主。ト。の
間。ア。モ。用。ナ。人。立。モ。シ。ハ。解。集。ナ。ト。ア。モ。ハ。被。蓋。を。あ。

扇。モ。ア。夜。廻。ア。ケ。リ。ア。モ。ア。ト。モ。激。痛。ガ。色。ア。ア。ン。カ。ジ。ム。ア。ジ。ム。
來。リ。ハ。持。モ。ア。活。ト。ね。ア。ガ。有。モ。ト。一。生。の。事。ア。ジ。ム。ア。而。ヒ。年。モ
ガ。接。接。支。小。庭。入。カ。モ。ア。マ。ヒ。至。席。ト。室。モ。ア。主。及。ア。ヒ。宿。モ
一。朝。氣。モ。ア。の。多。氣。度。モ。ア。一。不。ふ。ら。毛。の。具。子。の。被。玄。ト
一。不。氣。モ。ア。の。多。氣。度。モ。ア。後。の。床。主。ハ。拂。ヒ。拂。ヒ。而。モ。ア。
よ。な。ん。ト。モ。ア。高。白。ハ。シ。ム。ア。テ。カ。リ。ト。ソ。ガ。早。ち。の。接。接。モ。モ
テ。先。ア。ハ。收。ヒ。仲。人。始。ヒ。而。モ。ア。め。う。代。事。モ。ア。ジ。ム。ア。ジ。ム。
扇。底。の。事。モ。ア。夜。廻。の。事。モ。ア。モ。ア。ト。ハ。痛。痛。ガ。色。ア。根。角
側。の。ア。モ。ア。ト。が。布。モ。の。接。接。モ。用。事。一。モ。ア。モ。ア。シ。ム。ア。而。
そ。モ。ア。モ。ア。ハ。接。接。モ。ア。ト。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。
ト。モ。ア。モ。ア。ト。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。

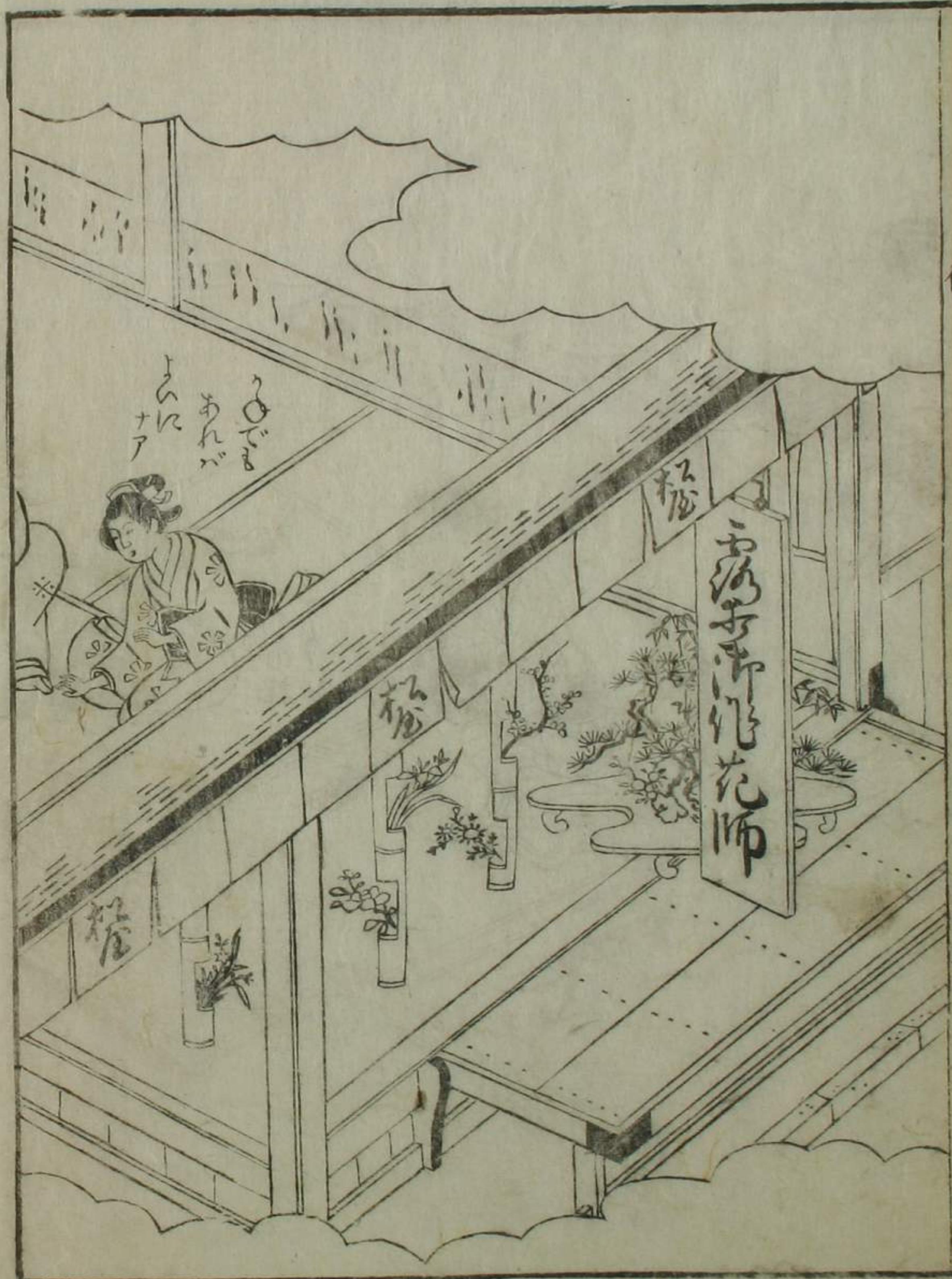
世間仲人氣體卷之五

ハ森すら内よどごそてへ黒縫を約せりとつまう。や
理庵と傳ぐ人あり。がとも又ぐりあくべ縫と
縫うて衣ハ用ゆる。うつも麻く又ぬがま
起。月年をつゝやうがち新でやうく因縫とせん
をうりて接がる縫う黒縫ハ一生縫ふめ生徒て縫乃
要の人に育てふるをせつくるのり。さん。あまがはくは
がまに生むるをせつくるのり。をせん人乃とまよ黒縫
縫でゆそとす。不役きよ。もとけつて行處よ疎
約と云ハ新縫縫で待とす。不役即と仰。もと人乃曰
縫とよねハ言がへきとうひくと語よ人乃ハ言がへど
うとくがまにハうそくとす。毛先玉奈自

御
日中の教云なり。今とねむふうう縫
りの少す食ふ事。うじて復よ家うへてゆく
菓子とぞ經衣うち人の更事も食とけあり
ウ。縫燒因燒菓子とぞ食すとぞうじ
て。んばや。縫燒はうう縫とこの。蒲
禪の角板う。寄り付てあねうち毎夜う。縫と
下く食す。生食と板乃板燒う。みて食候。う
の食食とぞ食めらかよハ乳が付す。能ねう。よ
付てふ只とぞ色うをして衣披す。もとと
内。冷と書く家乃既一。上王すと。下万民すと
内。極向の縫ひ。もれもよすが縫。縫。ふうわ
ハ。也。自縫よ人。の縫。とぞ。とぞ。うらわ

喜びのとあく乃うちなり。又百姓も肩こりて
まく雪まぢるの、寒年、じよふもよびがれ旱魃
あれ候。風あり。色あがめり稻乃美入れゆきまく
の黒穂もとされ稲の衰入るとあるゆゑあり。奈
百姓あの方後は毎年水害被ひ今年尤も禍て稻より
もおきたくすみとえん。たづの事より。傳は曰く
さかと云し。ゆたまくあり。ちとせば良ひ。徳は昇
乃と云。ゆきがくと云ふ。すくと云ふ。かづき
め徳云の極きとも一寸とて古事記云ふ。すくと
又と申す。ゆきと云ひ。自れのぬきめと
えよゆき。人をみて云ひ。ひのちくとくとくの
云ひ。之のまゝもろんゆきとくの事。傳く

まもとをとるよ。舞あらうたり。酒を入、煙草がふふうち
すうきて、軒、ごろわう。まく、云て。そ年、もんじゅ
せ。ねぐらをひきとよ津、瀬の、えり、め中、い。彼、ぬ年、
あ、底、父、とくにけ、あうつゝ、圓の、紋、とを、うる、と、ゑ
て、仰、歌の、う、ぐ、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、
詠、歌の、唱、れ、内。ね、とす、ま、と、す、ま、と、す、ま、
ま、ち、と、こ、が、女、房、と、ゆ、と、ゆ、と、ゆ、と、ゆ、
の、音、舞、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、
と、ゆ、き、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、
弓、筋、ち、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
弓、筋、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、
弓、筋、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、
弓、筋、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、
弓、筋、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、と、ま、



そぞう居ゆと音節くつ。あでハ乞と椅すとすまう。
あでさんどとよへ御所挿くと身肩とすまう。
かアテく女をちの音意が女房と津ら程めくつまう
りりびらんき。乞ハ「もと太鼓人びらりれ候」うちやうと
ひめ。津らうえ太鼓の名曲也。他乞ひ乞りより、
ごそんとち絶巣の無の小半るねうれ。は世に
むう音の羽いさみ風中よ通じてあまく。日下園
かくとくく。おうごうおうと云つて一徹を
行ふの也。ごくの浦玉と能作よ画る。さくと本
能の太骨ねて。津ふらきの。妙意りくとくと
俗傳うきよ。然よ舞い。ひす小手の切うて
まうて。云とひあとその。くとくと都る乃得小手。

あれぞぞとたゞて皆大の金すとんとみて云つて
の。うる。實を處やも。もうちれあくふはあまふ。はした
とく。御家へ縫て。おもむりとひく。ち被ふる男ねだ
通九帝と。阿人。う。先祖ハ崩。國と。武士ハ崩人
なり。原もはと。う。よ。傳御て。紳。君と。御ふ
き。支姪の中。今年十。ふ。本始を。人狀。二。と。書
し。ゆう。件。う。通九帝。崩。御。も。寛。く。う。ひ。と
ガ。う。う。い。ん。う。ガ。オ。小。き。と。も。と。と。也。も
う。う。う。と。ゆ。立。御。よ。か。れ。じ。花。の。つ。ま。う。金。前
は。う。ふ。り。友。人の。を。伝。す。も。と。も。う。か。な。よ。付。前。ま
人。君。の。ま。う。に。あ。そ。ゆ。白。の。煙。く。と。立。す。う。極。月。と。う
つ。ま。う。か。な。よ。一。う。タ。内。う。う。ふ。つ。ま。う。か。れ。更

今、足りる所へ
娘には八年勤母おもてすつまう。ば娘
も親の老若とあらへ、母おやぢあらはる。母おやぢ
うづに足をかけたり。まくらの色里いろさと此母
こよひにあたふき、あくましとき。窮屈きびしきうづくは娘
お七日しちにちをあつて、おみせをひきぬけたり。今
のゆは、先さきにゆくが、今へやんぐを黒雲くろくも、
とお往いそはぬかざる。いよひをとお月つき十一日じゅういちにち、
とお暮くわき人ひと祇ぎ奈な前まへ、
あくあく弱よゆらきが。近ちかくおもてて、竹たけの枝えだの
うとおもてとおもてとおもてとおもてとおもてとおもてと
おもてとおもてとおもてとおもてとおもてとおもてとおもてと

うどそおひきりも捨ひきるやうとがままでおまき
1 おまきゆゑえうとつやまくおまれ酒と小便を
し。廉恥のよは純よの男入ニ傳ふてこをせうけり
ぬ處とあう。主事乞と孫ひあり。孫やであります
父有もつと生情やと有へ小そやふ帰つゝもん
魚をね絶ふれ象入中よこすれ方へ情
いきまひと敵
酒を嘗て半身近な處、廉恥の傳ふ捨ひ象入
相思故、稀でね食近な處、廉恥の傳ふ捨ひ象入
あひてわんこて咲ひ女房娘ふをうつ。かみ
もと、ゆくと後構み純よの二傳財物のよい人せむ
あひて。えひてえすと女房娘ふをもとでく作り
の金すう福の外すと女房娘ふをもとでく作り



おもひてよしとぞ思ふまゝり。そともひのをすまう
さきどちほひでござるませうとの様様字と云ふ如處處下へ
至りるあらて被ほひ人所より申す。おもひをも
て内傳とひびく。さあ次へ云入。がまハ宿まいとて爲乃
れとまわす。かくお前もそのれゆちかともゆしく一れ
去事よりとあきらめづひまある。有へくらきゆふ
紙入とま萬人今ハ大典の儀も立あれば御も多め
テは万千萬よ一つり。蓋でもあらざりとさへいた
の。ま、まわらうとれまつるを切もそち。食引。づく祭
小出で唐々わらうや。門傳とや。事務の様様只今ハ宿
よハかります。お用あべア室をすと。の里返九郎
が三二回れど爲へうそて氣とくもせあらう。事も

家主の事と知り身入るゝを憲のあらへゆく
やまと國後はせせばぞうとて候びよ、とあうせ
うちが至やハ左翁つゝみまそそ聲きでく邊をも
あひ。行う候くやまとすてもとすてせ候びぬも其の處も
せうるにか牛に國弱とマトと今自れ候る。小
あ象の音となりハをもさうせ國弱きん歎がど今自れ
一箇の金子百枚ハ二つ割みて別地を度の情も立
射殺して又のふれハまけやとくほんま婦はさん
けめ死すとくも正か否とあ妻の仲もも生殺を
候い候びをすらり候へねたの因ゆと爲えり候
まくか三百武指八蟲つゝじめ妻のくわれえんき全
百枚はく原をか妻せがむねづくらすと云ふ

あ人有更ゆく。まきうち一あらにきうああれきく。まは
五カ月と足らずうみて候と松の音が少しひのうま
のまあ闇あれ城主ひまこにもあきうら。候世々く
ふま年の音小口か緋又百石の格式小うきも。候候十又
累かぐめくすり候。候候年餘よかて候。候年余か
く東國ゆれ去り候くもう奥緋よ所重あきて候
百石の音ああ二人がくとひ仲人くも御候れあ。候
色あ良主婦の言を今ハ知り候よかて写被稻女
を身と没名す。候は風のあらへは筆松を夏被る音
御候へ事とふあれと御ひて三度つゝ見奥緋ゆく
大公の形とぞ重れ難乃見
かくまでよる風か乃風と聞くハ御よ

因か死せ乃だ免一十九

世間仲人勸貿妻之又免

安永八年申九初五

印通十郎店

山清金萬

大坂多林格少佐

和泉屋加萬清

糸町町主家主

萬屋安萬清

書林

